



伝統校に差し込む二筋の光

最新技術と英語教育で次世代を生き抜く女性へ



京華女子中学・高等学校

マレーシア・シンガポール修学旅行（中3）

小堺伸一先生



1909年の創立以降、賢母教育を礎に、母として家庭を支え、仕事人として社会を支える自立した女性の育成に力を入れてきた。他校からも注目を集める独自の全人教育プログラムにとどまらず、ICTや豊富な国際交流プログラムで生徒たちの深い知識と豊かな心を育んでいる。



情報の授業ではPhotoshopの使い方を学ぶ



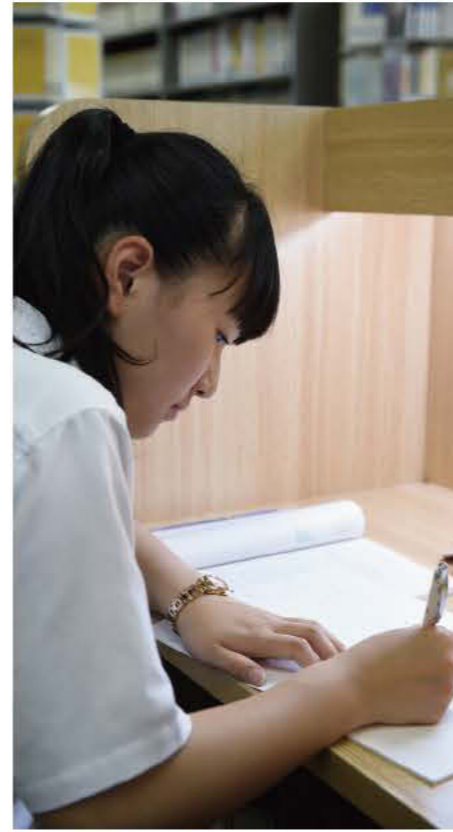
八代絵菜さん

一方、高校卒業までに全員が英検2級の取得を目指すなど、確かな語学力を育み、国際交流の機会が国際感覚を養う。

5月のマレーシア・シンガポール修学旅行(中3)で、マレーシアの現地校で代表スピーチをした八代絵菜さんは「私のつたない英語を一生懸命に聞いてくれて、みなさんとても優しくしてくれた。パティとは今でもEメールのやり取りをしています。返信がすごく速いです。うれしい反面、英語なのでちょっと困っています(笑)」とはにかむ。同行した森川智先生は、「同じアジア人なので、欧米人よりも生徒が積極的に話しかけやすい印象を受けました。英語を話す第一歩として良い経験だったようです。すると八代さんは、「シンガポールでは同じ班の子が中国語を話すのを聞いてとてもかっこよかったんです。修学旅行を通して、英語をもっとがんばろう! 中国語もやってみたい!」と思いました。ちょうど大学生の時に2020年の東京オリンピックなのでボランティアに参加して、将来は英語を使った仕事をしたいと考えています」と目をキラキラ輝かせる。時代の変化によって新しいものを柔軟に取り入れる伝統校の懐の深さが、新しい時代を担う底力を育んでいるのだ。

好奇心を刺激する国際交流

まさにICTは同校の目指す人間育成にピッタリと合致している。「これからの時代に求められるのは、生涯仕事を続ける自立した女性です。そのために必要なコミュニケーション能力と国際性を養う6年間にしたいと考えています」と語るのは大野葉子校長だ。「コミュニケーション能力をより伸ばすのがプレゼンテーション力の育成です。自分を表現する機会を多く設けることで、入学時、入前で話すことが苦手だった生徒も、高校生になるころには当たり前前に発表できるようになります」



本音を言うと、電子黒板やプロジェクタを用いたICT授業には懐疑的だった。導入したものの使いこなせないケースもあると聞いたことがあったからだ。ところがだ。授業をのぞいて思わず「なるほど」とうなずいてしまった。中1の英語を担当する小堺伸一先生がポンポンと画面を切り替えると、生徒はそれに合わせて大きな声で発音する。数学の図形の解説では、ワンタッチで拡大、展開。タッチパネルにさまざまな色で書き込むと、生徒も「あっ、なるほど!」という顔を見せる。

「学びのスタート時にICTを使っていることは大きいですが、カラフルで動く画像を見て感覚的にわかる、というのは電子黒板あつてこそその効果。以前は板書の時間で生徒の集中力が途切れることもありましたが、密度の濃い説明をスピーディーに行い、集中力を持続したまま演習を解くことでより深い理解へとつながられます」と話すのは守屋千尋先生(数学)だ。

なにより印象的なのが生徒の表情。まるで教科と遊んでいるかのように、全員が夢中になっている。ICTの導入で、授業でできることが広がり、生徒が楽しみながら学べる工夫をすることが自身の楽しみになっています。来年度からタブレットの導入も検討しているので、ますます生徒との双方の授業ができるかと期待しています」と小堺先生。すると守屋先生も「みんな身を乗り出して授業を聞き、「わかる人?」と問いかけると、「ハイ! ハイ!」と手を挙げるんですよ」とにっこり。

教員の教える姿勢が楽しい授業をつくり、生徒の積極性が教員を刺激する。この前向きな化学反応の源は、素直で元気な生徒の雰囲気だ。1クラス20人以下の少人数制。英会話文の暗唱の発表でも、二人一組になり、声の調子や例文にアレンジを加え、クラスには大きな笑いが起こる。気心の知れた友達の前だからシャイになる必要も、失敗を恐れる必要もない。

「必ず全員が発表する時間を設けています。人数が少ないですから、全員が主役

京華女子だから活きるICT



大野葉子校長



森川智先生



守屋千尋先生